

農業機械は

中古品を活用しよう

全国農業協同組合連合会顧問

黒川 計

農業機械の過剰投資がやかましく云われ初めてから、だいぶ年月がたっている。

そこで更に、農業機械が米の生産費に占める割合の変化をみてみよう。

すなわち、昭和30年には玄米 150 kg 当りに占める農具費の割合は、僅か 6% であった。当時の肥料費は自給肥料の分も含めて 21% で、肥料費の 3 割にも達しなかった。

それが昭和43年には、労働費を除いて最高となり、肥料費を追い越している。その後、農具費の額は急速に増加し、昭和47年には総額の 24% となっている。

農業生産の合理化を目指して稲作、野菜、果樹および畜産などの団地化が叫ばれ初めてから 10 年余になる。合理化の内容の中には、機械や施設の経済的合理化も含まれていることはもちろんである。

しかし、機械の面からみると、他にも大きな一面がぬけているように思われる。中古機械の利用促進などである。

私は 13 年前に施肥播種機の調査のため、80 余日に亘りアメリカを旅行したことがある。北はミシガン州から南はアラバマ州まで、13 の州におよんだ。そのうち南カロライナ州のクレムソン大学に約 1 週間滞在して、州内を車であるいた。

南部のこの地方は農家の耕地面積は狭く、12ha くらいの極く小さなものも少なくない。30ha のものは大きい方に属していた。農家の兼業率も高く、ある村では 80% にも達していた。

こんな地方でも自動車の販売所のようににぎやかに旗を立てた農機具販売所があった。ところが大部分は中古品を売っていた。

この辺の農家に事情をきいてみたら、この地方

では大部分は、広い耕地を持った中・北米の農家が使った中古品を使っていた。僅か 1 年使ったものでも、価格は半値になるとのことであった。

また、ある 30ha 余作っている農家を訪問したら、英国製のトラクターを手入れをよくして、既に 15 年間使っており、まだまだこれから何年も使えるとも云っていた。

これに対応するかのような農機具メーカーの態度にも感心した。イリノイ州モーリン市にあるインターナショナル工場に行ったところ、場内至るところに「品質と安全」の標語が張ってあった。

また新しく生産されたトラクターには、10 年前のアタッチメントをつけての試験もしていた。更に工場内に 4 段積にした古い工作機械が保存してあった。どのくらいの金額になるかときいたら当時の価格で 400 万ドルに当るとのこと。古い機械の注文が来たらこれで作ってやるとのことであった。毎年モデルチェンジして、5 年前の部品さえ持っていない日本のメーカーとは、天と地の差である。

中古機械の効率的な活用も、農機具の生産、利用および消費の一環した態勢が整って初めて可能なのであろう。

通産商省や農林省も、メーカーの方ばかり向いの施策でなく、需者者の農家に向けた施策に転換してもらいたいものである。

日本の農機具の消費見込額は表のように約 1862 億円になる。中古品を半分使い、中古品の価格を新品の $\frac{1}{2}$ とすると、農家の農機具負担額は $\frac{1}{4}$ 減ることになる。

更にまた、農機具を大切に取扱い、常に整備しておけば、償却費を大巾に低減させることができる。省資源の意味からも、今後ぜひとも考えなければならぬ。

農業用機械の消費見込額 (1972年)

1. 農業用機械		2. はん用内燃機関		3. 農業用機械 総見込額
	(100万円)		(100万円)	(100万円)
生産額	167,809	生産額	40,941	
輸入額	9,338			
輸出額	11,416			
消費見込額	165,731	同上中農業 用諸費推算 (1/2)	20,470	186,201